

令和4年度修了生 修士論文概要

論文題目：親の精神疾患に関する情報を得た経験が、精神疾患の親をもつ子どもに与える影響

氏名：岩根 由佳

概要

精神疾患の親をもつ子どもは、親の精神疾患に伴う様々な困難を経験している一方で、親の精神疾患について十分な説明をされないことも多く、成人後に「親の精神疾患を説明してほしかった」と振り返るものも少なくない。子どもが親の精神疾患を知る経緯やそれに伴う体験が子どもに及ぼす影響を明らかにすることは、精神疾患の親をもつ子どもへの支援を検討する上で重要である。

そこで研究1では、親の精神疾患に関する情報を入手するプロセスが精神疾患をもつ親との生活や子ども自身に影響を与えるプロセスを明らかにすることを目的に、精神疾患の親と暮らした経験を持つ成人10名にインタビュー調査を実施した。その結果、子どもは親の精神疾患により混乱や葛藤を感じていること、家族や社会との関わりの中でスティグマを認識する場合があること、周囲からの説明や自ら調べることで精神疾患の情報を得ることが示唆された。これらの経験は、精神疾患をもつ親の理解や子どもの自己理解、自己受容に影響を与えていることが示唆された。精神疾患の親をもつ子どもが親との生活に伴う困難に対処し、自らの人生を生きやすくするために、各家庭の状況に合わせた説明や、家族全体の支援、社会全体の精神疾患への理解が必要だと考えられた。

また研究2では、親の精神疾患に関する情報を入手した経験と、精神疾患に関する公共スティグマの認知、首尾一貫感覚の関連を検討することを目的に精神疾患の親と暮らした経験を持つ成人51名を対象に質問紙調査を行った。その結果、親の精神疾患を他人に知られてはいけないものとして説明されることが、情報を入手した時の精神的な負担感の高さに関連すること、また精神的な負担感、状況に対処したり経験を成長の糧とするような子どもの感覚を妨げることが示唆された。社会全体の精神疾患への偏見を改善するとともに、子どもの精神的な負担感を軽減する支援が必要だと考えられた。

論文題目：女子大学生の就職活動における性役割態度とストレスの関連についての検討

氏名：大崎 詩生

概要

女子大学生における就職活動は、先行研究から、精神的健康やストレス反応において男子学生との間に差が認められることが示唆されている。本研究は、女子大学生の就職活動において、彼女らの持つ性役割態度がどのように就職活動ストレスに機能しているのかに

ついて検討することを目的として質問紙調査を行った。

調査対象者は関東圏内の4年制女子大学に通う大学3・4年生209名であった。質問紙の構成は、(1)属性と就職に関する質問、(2)就職活動ストレス尺度(就職活動を経験した者のみ回答)、(3)平等主義的性役割態度スケール短縮版(A short-form of the Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes:SESRA-S)(点数が高いほど性役割の平等志向性が高い)、(4)自尊感情尺度よりなる。209名のうち、就活群(就職活動を経験した群)117名、非就活群(就職活動を経験していない群)92名に分類した。

2群の比較では、就活群は非就活群よりも自尊感情が有意に高かった。就活群においての検討では、就職活動ストレスに対する性役割態度の調整変数としての機能を検討するために階層的重回帰分析を行った。就職活動ストレスに対し性役割態度と自尊感情は負の影響が認められた。重決定係数の変化量が有意であり、SESRA-Sと自尊感情の交互作用項における標準偏回帰係数も有意傾向を示したため、SESRA-Sと自尊感情の交互作用における単純傾斜検定を行った。この結果から、性役割態度と自尊感情の高さは、就職活動ストレスを低くすることが示された。さらに、性役割態度が低い場合であっても、自尊感情が高ければ、就職活動ストレスをより軽減する可能性が示唆された。

論文題目：両親からの自己開示が女子大学生の自己開示と首尾一貫感覚におよぼす影響について—自己開示のポジティブ・ネガティブな内容に着目して—

氏名：乙部 萌

概要

目的：自己開示の機能には精神的健康を促進する機能があり、精神的健康を維持する概念の1つにSense of Coherence(首尾一貫感覚：SOC)がある。それぞれの研究では、精神的健康への影響に着目した研究が多く、精神的健康を維持要因との関連を検討する研究はあまりみられない。本研究では、両親からの自己開示が女子大生の自己開示およびSOCに影響について自己開示のポジティブとネガティブの内容に着目して検討することを目的とした。

方法：女子大学生229名を対象として、質問紙調査を実施した。使用した尺度は、日本語版SOC-13(山崎・吉井, 2001)と自己開示尺度(Jourard Self Disclosure Questionnaire: JSDQ)を基に作成された「母親自己開示尺度」(小口, 1991)を参考に作成した母親用、父親用、友人用の自己開示尺度である。各自己開示尺度には、ポジティブ項目とネガティブ項目も作成した。分析では、各自己開示項目の検討、両親からの自己開示量および友人への自己開示量、SOCの強さの傾向の関連を検討した。

結果：重回帰分析を行った結果、母親からの自己開示を多く認知していると、有意味感が高まる傾向と友人への自己開示も多くなることが示唆された。母親からのポジティブな内容の自己開示を多く認知していると、処理可能感と有意味感が高まる傾向が示唆された。

考察：母親の自己開示および母親のポジティブな内容の自己開示は、自己開示のスキル獲得や人生における出来事を対処できる感覚および出来事への意味づけに影響をおよぼすことが考えられる。

論文題目：「青年期における挫折経験のとらえ方に影響を及ぼす個人内要因としての防衛機制について」

氏名：奥石 早希

概要

【目的】青年期における挫折経験のとらえ方に影響を及ぼす個人内要因としての防衛機制に注目し、その関連を明らかにすることを目的とした。【方法】関東圏内の336名の大学生を対象に、オンライン調査・質問紙調査を実施した。①フェイスシート（性別・年齢・挫折経験の有無・挫折感の強さ）②挫折経験のとらえ方尺度（姜・清沢，2017）③DSQ-40（鈴木・速水，2015）を使用した。本研究は、跡見学園女子大学研究倫理審査委員会の承諾を得て行われた（倫院-22-006）。

【結果】防衛機制の性差について、男性では「極端思考・他者攻撃」と「自己統制」、女性は「感情抑制・代替満足」という防衛機制を用いやすいことが明らかとなった。

また、「感情抑制・代替満足」という防衛機制を用いる傾向があると、挫折をネガティブな経験としてとらえやすい傾向があり、「自己統制」という防衛機制を用いる傾向があると、挫折をポジティブな経験としてとらえやすい傾向があることが示唆された。

さらに、強い挫折感を挫折経験に対して抱いていると、挫折経験がない群と弱い挫折感群に比べて、挫折をネガティブな経験としてとらえやすく、防衛機制は「感情抑制・代替満足」を用いている傾向があることが明らかとなった。

【考察】青年期において、自我が脅かされる挫折経験から、自我を守るために、「自己統制（主に成熟した防衛機制）」という防衛機制を用いやすい傾向にあると、挫折をポジティブな経験としてとらえることができる一方で、「感情抑制・代替満足（主に未熟な防衛機制）」という防衛機制を用いやすい傾向にあると、挫折をネガティブな経験としてとらえていることが明らかとなった。

論文題目：女子大生における心理的自立及びジェンダー・アイデンティティによる成功恐怖への影響について

氏 名：五反田稚子

概 要

本研究の目的は、心理的自立の程度がジェンダー・アイデンティティの獲得へ与える影響を捉えたうえで、それらが成功恐怖に及ぼす影響の検討である。私立X女子大学女子学生213名に対して、質問紙調査によりFS測定尺度、心理的自立尺度、ジェンダー・アイデンティティ尺度の回答を求め、相関分析及び重回帰分析を行った。また、成功回避行動の状況・時期・理由について自由記述による回答を求め、カテゴリー化を行った。相関分析の結果、3尺度間において複数の有意な相関がみられた。重回帰分析においては、心理的自立尺度によるジェンダー・アイデンティティへ尺度の有意な影響がみられ、心理的自立尺度とジェンダー・アイデンティティ尺度によるFS測定尺度への有意な影響もみられた。また、成功回避についての自由記述から、状況においては「勉学・進路」が最も多く、時期においては「高校生」が最も多く、「中学生」が2番目に多くみられた。理由においては「自信のなさ」と「外的要因」が最も多くみられた。

以上のことから、現代の女子大生において心理的自立の程度によるジェンダー・アイデンティティの獲得への影響と心理的自立の程度やジェンダー・アイデンティティの獲得による成功恐怖への影響について明らかになった。しかし、青年期においては「勉学・進路」といった状況から回避行動がみられ、主に「外的要因」や「自信のなさ」によって回避行動が起りやすくなっていることが明らかになった。

論文題目：内的作業モデルが共感の喚起および共感の結果に与える影響
—共感の組織的モデルによる検討—

氏 名：田島 秀彬

概 要：

共感と内的作業モデルの関連を明らかにすることは、養育環境によって不安定な内的作業モデルを形成した人々の共感の在り方を理解し、より適応的な社会的行動を促進するための支援に役立つと考えられる。そこで、本研究では1)「共感の組織的モデル」の中に内的作業モデルを位置づけ、内的作業モデルが「過程」(自動的共感、役割取得)を媒介として間接的に、あるいは直接的に、共感が生じる場面における「個人内的結果」(並行的感情反応、感情理解、他者指向的反応)に与える影響について検証を行う。2)「共感の組織的モデル」における「先行条件(内的作業モデル)」、「過程」及び「個人内的結果」が「対人的結果」に与える影響について検証を行う。3)内的作業モデルの2次元4分類による「過程」、「個人内的結果」及び「対人的結果」の違いについて明らかにすること

との3点を目的として検討を行った

1) に関して、見捨てられ不安は「過程」に相当する自動的共感や役割取得を介して「個人内的結果」に相当する並行的感情反応、感情理解、他者指向的反応に対する正の影響が認められた。2) に関して、内的作業モデルは「対人的結果」に相当する「行動したいができない」との正の関連が認められた。また並行的感情反応、感情理解、他者指向的反応と「行動したいができない」との正の関連が認められ、役割取得と「行動しようとしていない」との負の関連が認められた。3) に関して、とらわれ型、恐れ型は安定型より並行的感情反応が生じやすいことが示された。また「行動したいができない」が安定型では生じにくいこと、逆にとらわれ型は生じやすいことが示された。

これらの結果から、見捨てられ不安の高い個人は、まず自身のこととして捉えたうえで、相手を思いやる、気持ちを理解するといった共感のプロセスを持っていること等が示唆された。

論文題目：「自分の強みを探して活かす」サイコエデュケーショナルグループプログラムのデザインおよびその効果の検討
— ストレングス・スイッチを目指して 女子大生を焦点に —

氏名：寺上 愛香

概要

本研究は、女子大学生を対象に、強みに着目した「自分の強みを探して活かす」サイコエデュケーショナルグループをデザインすること、およびその効果を検討することを目的とした。Furr (2000) の6ステップモデルをもとにプログラムをデザインした。研究対象者は、X女子大学生であり、実験群11名、統制群12名であった。本プログラムは、強みテスト（簡略版VIA）（宇野，2014）に回答し自分の強みを知った上で、これまでの成功体験・失敗体験をそれぞれ書き出し、どの強みがどのように活かされていたか、もしくは、どの強みをどのように活かせば、成功に導けるかについて検討するよう指示した。事前事後の評価には、ポジティブ感情尺度（伊藤・宮崎，2012）を用いた。従属変数をポジティブ感情、ポジティブ感情尺度の4つの下位尺度、および各質問項目、独立変数を群および時期とした、2要因の分散分析（混合計画）を行った。その結果、「勇敢な-臆病な」「しっかりした-たよりない」などの4つの質問項目においてポジティブな方に高くなった。中でも4つの下位尺度の「健全な闘争」に含まれる項目においてやや大きな変化が見られ、研究対象者は強みを知ることで健全なポジティブな闘いモードに変容したのではないかと考察した。本研究の限界として、フォローアップの効果の測定を検討すること、1回限りのプログラムではなく、複数回から構成されるプログラムを検討することも必要であるかもしれないと考察した。

論文題目：女子大学生における拒否に対する感受性と認知的統制が対人ストレスコーピングに及ぼす影響について

氏名：富田 りさ

概要

拒否に対する感受性は対人関係での問題や苦痛を引き起こしやすく、精神的健康に対するネガティブな影響が指摘されている。本研究では、個人の思考や行動を調整する側面である認知的統制と対人ストレスコーピングに注目し、拒否に対する感受性が精神的健康に影響を及ぼすメカニズムを検討することを目的とし、女子大学生236名に質問紙調査を実施した。

共分散構造分析による分析を行った結果、拒否に対する感受性は、認知的統制のスキルである論理的思考と破局的思考の緩和の双方に負の影響を及ぼすこと、不適応的とされるネガティブ関係コーピングを選択しやすいこと、精神的健康にネガティブな影響を及ぼすことが示された。

また、認知的統制のうち、論理的思考は適応的なポジティブ関係コーピングに有意な正の影響を及ぼす一方で、不適応的なネガティブ関係コーピングにも有意な正の影響を及ぼすことが示唆された。また破局的思考の緩和は解決先送りコーピングに有意な正の影響を及ぼすこと、さらに精神的健康にポジティブな影響を及ぼすことが示された。対人ストレスコーピングのうち、ネガティブ関係コーピングのみ精神的健康に有意なネガティブな影響が認められた。

これらの結果から、拒否に対する感受性の高いものは精神的健康を阻害されやすいことに加え、認知的統制のスキルを使用しにくいこと、対人ストレス場面でのコーピングもより不適応的なものを選択しやすいこと、そして、これらの認知的、行動的な特徴を介して精神的健康を阻害されやすいことが示唆された。

論文題目：韓国系ニューカマーの心理社会的過程に関する質的研究
—大学講師を対象として—

氏名：長谷川みなほ

概要

近年グローバル化により人々の移動はより顕著なものとなった。1970年代以降、来日し定住する外国人を「ニューカマー」と呼んでいる。ニューカマーの心理社会的研究は児童期の研究はあるが、成人の韓国系ニューカマーの研究は少ない。そこで、韓国系ニューカマーが日本に適応する過程を心理社会的に分析することにした。

X大学で兼任講師をしている知的水準の高い韓国系ニューカマー4名を対象とした。来日以後に感じた困難とそれへ対処、欲しかった援助等について半構造化面接を行い、M-GTAを用いて分析した。その結果、来日以後に感じた困難の大カテゴリーには、【国民性の

違いによる困難】【コミュニケーション・コミュニティの困難】【差別】【経済的困難】が抽出された。困難への対処として【性格による対処】【韓国での経験による対処】【行動面での対処】【認知面での対処】【相談・援助による対処】が抽出された。欲しかった援助または現在欲しい援助として【コミュニケーション・コミュニティ】【その他】、日本に在住予定の韓国人にしたいアドバイスとして【コミュニケーション・コミュニティのすすめ】【努力】が抽出された。

困難について、エリクソンの発達課題における「親密さ」対「孤独」から考察した。困難に対する対処は、「問題解決」、「認知的再解釈」、「相談・サポート希求」、「回避」に分類した。これから来日するニューカマーへのアドバイスとして、コミュニティに参加すること、日本人とのコミュニケーションをとること、などが挙げられた。これは、ニューカマーを受け入れる日本側の支援としても重要な視点である。

論文題目：コロナ禍において女子大学に不本意入学した学生の大学への適応プロセスについて

氏名：菱谷 康代

概要

近年、わが国では、学歴社会が変容してきていると言われているが、偏差値や大学名を重視する考えが根強く残っている。そのため、大学受験は将来を左右するかもしれない分岐点となり、大学受験に失敗し、不本意入学した学生は大学生活に不適應感を持ちやすいことが分かっている。さらに現在、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響により、行動制限がかけられ、収束の見通しが立たない不安の中にある。

本稿では、そうしたコロナ禍において、不本意入学した学生がどのようなプロセスを辿って大学に適應していくのかという点に焦点を当てて研究を行った。分析方法は、個人の人生を丁寧に理解し、そこから新たな発見を得ることを目指し、複線径路等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) を用いた。その結果、調査協力者3名の大学適應プロセスをTEM図で表し、大学適應要因が明らかになった。また、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) によって、不本意入学に至るプロセスと、大学適應に大きな影響を与えたとされる価値観の変容プロセスの検討を行った。さらに、不本意入学による大学への拒絶感・不信感が大学生活にどのような影響を与え、その中でコロナ禍がどのように作用してくるのかという点についても具体的に検討を行った。総合考察では、不本意入学した学生の内的適應と外的適應について言及し、不本意入学というネガティブな体験が自分を見つめるきっかけとなり、内的適應感を高める機会となっていることが示唆された。

論文題目：心理系学部女子学生におけるキャリアデザインに関する意識の研究－女性管理職が求められる時代のジェンダー役割をめぐって－

氏名：星 忠明

概要

本研究では、心理系学部の女子学生が自身のキャリアデザインと、ジェンダー・ギャップについてどう感じているかを明らかにし、女性の社会進出促進の一助とすることを目的に行った。大学3年生の学生に半構造化面接調査を行い収集した6名のデータ（就職希望組と進学希望組がそれぞれ3名に分かれた）を、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を採用して分析した。

キャリアデザインについては、就労意識はあるが、育児と仕事の両立には負担感が強く、基本的には育児に専念したいという傾向が見られた。そのなかで、進学希望組では、心理専門職の専門性を活かすことで、働き方の幅を持たせることへの期待が窺えた。また、夫婦間の役割分担に期待できなくとも、母親や祖母の支援があることで、就労継続の可能性があるという事例もあった。また、キャリアアップについては総じて消極的な捉え方をしていた。責任が増すことがストレスにつながると考え、回避したいという意見が大勢を占めた。なかで、進学希望組においては、心理専門職としてのスキルアップをキャリアアップと捉える傾向が見られ、その範囲では肯定的な捉え方が主流であった。

ジェンダー・ギャップについては、女子大在籍ということもあり、実感としてはほとんどないという回答だったが、家庭内のジェンダー役割の問題については、女性が一方的に家事育児を担っていると感じていた。ただし、その事実自体も肯定的に捉える意見もあり、家事育児を女性が単独で担うこと自体を、肯定的に捉えている学生と否定的に捉えている学生が存在した。

論文題目：初発術後乳がん患者への心理社会的介入を目的とした、サイコエデュケーション開発の質的研究

氏名：皆川 優希

概要

本研究の目的は、手術後の心理社会的状況について検討すること、ポジティブサイコロジーで現在注目を浴びているストレングス（強み）を生かしウェルビーイングな状態に近づくサイコエデュケーションの開発、以上2点を検討することである。研究対象は、X病院に通院している20歳から65歳の初発術後乳がん患者7名であった。方法として、サイコエデュケーションをブラッシュアップしていくために、プログラム案1からプログラム案3ごとに人数を分配し、研究対象者の心理社会的状況とプログラム案に関する半構造化面接を実施した。予備面接をもとに作成したプログラム案の内容としては、九分割統合絵画法、家族関係単純図式投影法、Who am I, Virtual Reality、4つのワークから構成されてい

る。対象者への半構造化面接の音声データをテキスト化し、共起ネットワークによる分析と対象者の発話がどのような用いられ方をしているか、コンコーダンスから引用し内容分析を行った。それらを反映させた結果、プログラム案1から4点の変更が生じた。1点目は、ワークを実施する順番は侵襲性が低いVirtual Realityを設定し、その後家族関係単純図式投影法、九分割統合絵画法、乳がん患者本人に焦点をあてるWho am Iを設定する。2点目は、乳がん患者ごとにVirtual Realityの視聴時間を調整すること、3点目は、家族関係単純図式投影法の教示文を追加すること、4点目は、九分割統合絵画法とWho am Iには可能な範囲で記入してもらうことを教示文や案内を行うことである。

論文題目：『内的ワーキングモデルが大学生のソーシャルスキルおよびキャリア・アダプタビリティに及ぼす影響』

氏名：村山 詩乃

概要

内的ワーキングモデルは、対人関係を形成するひな型である。また、対人関係において重要であるソーシャルスキルは、就職活動を始める時期の若者にとって、特に重要な要因となると考えられる。さらに、自分にとって意味のあるキャリアを積むために必要な心理的資源であるキャリア・アダプタビリティの発達に、内的ワーキングモデルやソーシャルスキルとの関連性が推測される。これらの関連を、適応促進の観点から探索的に検討することを目的とした。女子大学生216名を対象に、「Internal Working Models尺度（戸田，1988）」、「成人用ソーシャルスキル尺度（相川，2005）」、「キャリア・アダプタビリティ尺度（北村，2021）」を用いた調査を実施した。本研究は、跡見学園女子大学の倫理委員会において承認を得た（倫院-22-004）。パス解析（ $R^2 = .236 \sim .573$ ）の結果、Internal Working Models尺度の「安定」が、成人用ソーシャルスキル尺度の「関係開始」、「記号化」、「主張性」、キャリア・アダプタビリティの「未来自信」に、正の影響を及ぼしていた。成人用ソーシャルスキルの「解説」が、キャリア・アダプタビリティ尺度の「好奇心」に正の影響を及ぼしていた。また、成人用ソーシャルスキルの「関係維持」は、キャリア・アダプタビリティ尺度の「未来自信」に、正の影響を及ぼしていた。本研究において注目した点は、調査協力者の内的な素質にとどまったことから、外的な環境からの影響についての調査の不足が考えられた。今後の研究において、キャリア・アダプタビリティを促進するものは何かを、内的かつ外的な視点を持ち、キャリアに視点を当てた適応を考え続け、支援に役立てる必要があると考えられる。

論文題目：コミュニケーション・スキルが低い人の援助行動に関する探索的研究

氏名：渡辺 優華

概要

本研究の目的は、援助行動場面におけるコミュニケーション・スキルの低い人の困難を、コミュニケーション・スキルの高い人と比較しながら探索的に明らかにすることであった。関東県内の大学に通う女子大学生、大学院生182名を対象に、質問紙調査によりコミュニケーション・スキル尺度ENDCOREs、援助行動に関する質問項目の回答を求めた。その結果、コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREsの下位尺度得点を基にしたクラスタ分析を行い、高群、中群（表現力低）、中群（自己統制低）、低群の4つのクラスタを得た。援助行動に関する質問項目で得られた自由記述については、質問項目ごとにKJ法を模した手続きによりカテゴリー化を行った後、低群中心に他のクラスタと比較しながら援助行動の特徴を記述した。

本研究の結果、コミュニケーション・スキルの低い人たちは援助行動場面については「対人関係について」や「自分自身について」に分類される回答が多かったことからその2つの場面で困り感を抱いているということが明らかになった。また、友人に対する援助行動場面に対して何かしらの援助行動をしており、被援助者に対して思いやりの気持ちや助けたいという気持ちを抱きやすい傾向があることがある一方で、援助行動をしたものの、コミュニケーション・スキルが低い故に被援助者の状況が理解できなかったり、適切な対応が分からず困難を抱えていることが示された。